HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	テオフラストスの生涯と著作（1）：Diogenes Laertius V巻 36-37節の訳と注（テオフラストス研究 I）
Author(s)	斉藤，和也
Citation	北海道大學文學部紀要，33(1)，1-34
Issue Date	1984-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33488
Type	departmental bulletin paper
File Information	33(1)_P1-34.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

テオフラストスの生涯と著作 (1)

——Diogenes Laertius V巻 36-57節の訳と註——

（テオフラストス研究 I）

斉　藤　和　也

はしがき

アリストテレスが齢50にしてアテナイに学校を開いた時[1]（B. C. 335/4），師のアッソス滞在時代以来ずっと，彼の下で研究に従事してきたテオフラストス[2]は，働き盛りの38歳であって，組織的に科学的研究を進めていこうとするペリパトス派にあっては不可欠の人物であった。前の年にすでに，マケドニアではアレクサンドロスがフィリップⅡ世の跡を襲っているが，それから10有余年にわたって，アテナイは，マケドニアの将軍アンティパトロスの管轄の下に置かれることになる。アリストテレスの学校は，この将軍の庇護による恵まれた条件の中で発展していった[3]。

だが，アレクサンドロスの急死（B. C. 223夏）が反ケマドニア派に反乱の機会を与えると，これを敏感に察知し，己が身にふりかかる危険を感じ取ったアリストテレスは，学校の指導をテオフラストスに委ね，自分はカルキスに退いたのである[4]。この時，テオフラストスは，奇しくも，アリストテレスが学校を開いた時と同じ年令を迎えていた。それから晩年に至る35年の間，彼は学頭として研究と教授の活動に従事した。

関心領域の広さと学識の深さにおいて，師に比肩し得る人は，ペリパトス派の中でテオフラストスただひとりなのであるが，彼の著作は，残念ながら，植物学書など幾つかの著作を除いては，断片的にしか残っていない[5]。

この哲学者について，一般に説かれているところでは，テオフラストスは，師の様な創造的精神を欠いてはいたが，研究対象の細部にわたってその差異を巧みに指摘する能力や事実に合わない理論の弱点を剔出する能力に優れていたので，師の体系の枠組の中で研究を進めながらも，その体系の個々の部分を確定し全体を発展させることに功績があった，とされている(6)。

かかる見方が果たして正しいかという問いに答えるには，個々の領域において個別に詳細な研究を行なわなければならないが，ここでは，その内の幾つかについて極く簡単に触れるにとどめざるを得ない。まず，師の説から離れていると見做される場合を見るならば，物質理論において，テオフラストスは，師の説に重要な変更を迫ると思われる，四元素についての独自な観察事実を指摘したが，その観察事実を理論的に基礎付けるまでには至らなかった(7)。また，「形而上学断片」において，彼は，不動の動者と天体運動に関して，師の説を批判したが，それに代わる新しい見方を提示したわけではなかった(8)。能動理性に関して師に批判的に難問を向けているように見える「霊魂論断片」において能動理性が内在的であると考える場合でも，それは，理性の不生不滅を前提してのことであり，その他の論点を重ね合わせて判断しても，彼の議論が師の説に修正を迫るものであるとは言い難く，むしろ，それは，師の説を補完しながら解釈していったものであると考えられるのである(9)。これに対し，植物の部分に関する形態学的概念を完成させた彼の植物学は，基本的には，観察事実の積み重ねに基づいて原因の探究に向かう，師の動物学研究の方向に沿うものではあるが，この分野における彼の独自性を見逃すわけにはいかない。即ち彼は，動物とは異なる，植物に固有の実情に即した理論（οἰκεία θεωρία）を立てるに際し，動物学における概念を類比によって植物の世界に適用する安易な道は選ばず，植物の世界における様々な差異をできる限り詳らかにしながら，弾力に富んだ概念を作り出していく方途を取ったのである(10)。

彼の資料収集の努力は，アリストテレスに協力して書き上げた158に

及ぶポリスの「国制誌」(DL V 27) にその一端を窺うことができる。彼が師の体系に沿って集めた資料は，ほとんどの学問分野にわたっていて，その情報は，後世の諸家の書物に吸収・保存されている。

この様に精力的な学問的活動は，ディカイアルコスとの論争において，「理論認識的生活」を「実践的生活」よりも優位に置いた彼の学者魂に支えられていた[11]。彼の倫理学は，フロネーシスに諸々の徳を統括する機能を与え，倫理的徳(アレテー)と知的徳(アレテー)とを区別する，その枠組において師の圏内に留まるものであるが[12]，同時に，自然主義倫理学の傾向を帯びたものでもある[13]。アレテーに即した活動として規定される幸福に外的善が関与するとの彼の説[14]は，ストア的倫理主義の対極に立つものである。

『性格論』に描かれた人物像が，いずれも悪徳の保持者であるにもかかわらず，倫理学的臭いを感じさせないのは，具体的な事実の中に差異を見出そうと常に事物に撒した彼の認識態度によるものであろう。

この書に見られる様な透徹した批評眼は，彼の流暢な語り口と相俟って，一般向けの講義を魅力的なものにした[15]。この講義を通して彼は広くアテナイの人々に親しまれていたらしく，85歳の長寿を全うした葬儀の日には，実に多くの人々が彼の死出の旅を見送ったという。

本稿は，テオフラストスの生涯に関する唯一のまとまった資料である「ディオゲネス・ラエルティウス，有名な哲学者たちの生涯と学説」の第5巻第2章35～57節を訳出し必要な註記を行なったものであるが，これに含まれる著作目録についても註を付けた。これは著作の同定と，その概観を与えることを目的としたもので，学説の詳しい検討には立ち入っていないが，必要な説明は付したつもりである。

翻訳の底本として次の校訂本を使用した。カッコ内は本稿で使用する略号である。

- Diogenis Laertii Vitae Philosophorum, recognovit H. S. Long, Oxonii, 1964, Oxford Classical Text (Long)

訳出に際して，次の諸訳本を参考にした。

- Diogenes Laertius with a English translation by R. D. Hicks, vol. I, 1925, Loeb Classical Library(Hicks)
- Diogenes Laertius, übersetzt und erläutert von O. Apelt, Bd. I, 1921, Philosophische Bibliothek, Band 53 (Apelt), K. Reich によるこれの増補第2版 (1967) がでている。
- Diogenes Laertius de vitis ..., ed. H. G. Huebnerus, テキストとラテン訳 (Ambrosius 訳), 1828, vol. 1., Commentarii in Diogenem Laertium, vol. 1, I. Casauboni notae etque A. Menagii observationes et emendationes (Hübner).

訳註において使用した文献は次の通りである。

- L. Bauchet, Histoire De Droit Privé De La République Athénienne, 1897, rep. Arno, 1976, vol. III (Bauchet).
- J. Bernays, Theophrastos' Schrift über Frömmigkeit, 1866, rep. Olms, 1979 (Bernays).
- I. M. Bochensky, La Logique de Theophrast, 1947 (Bochensky).
- C. A. Brandis, Handbuch der Geschichte der Griechisch=Römischen Philosophie, III, 1 (Brandis).
- K. G. Brun, Die Testamente der griechischen Philosophen, Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte, t. I, Romanistische Abtheilung I (Brun).
- A.-H. Chroust, Aristotle, New light on his life and on some of his works, 1973, vol. 1 (Chroust).
- E. Derenne, Les Procès d' Impieté, 1930, rep. Arno, 1976 (Derenne).
- H. Diels, Doxograhi Graeci, 1879, editio iterata, 1929 (Diels).
- P. M. Frazer, Ptolemaic Alexandria, 1972, 3 vols (Frazer).
- W. K. C. Guthrie, A History of Greek Philosophy, vol. 6, Aristotle, 1981 (Guthrie).
- W. Jaeger, Aristoteles, 1923 (Jaeger).

- W. M. Kneale, The developement of Logic, 1962 (Kneale).
- W. Kroll, Paulys Real-Encyclopädie der Klassischen Altertums Wissenschaft, Supplementband VII, 1039-1138, Rhetorik (Kroll).
- J. P. Lynch, Aristotle's School, 1972 (Lynch).
- D. M. MacDowel, The Law in Classical Athens, 1978 (MacDowel).
- P. Moraux, Les Listes Anciennes des Ouvrages d'Aristote, 1951 (Moraux).
- O. Regenbogen, Paulys Real-Encyclopädie der Klassischen Altertums Wissenschaft, Supplementband VII, 1354-1562, Theophrastos (RE〔巻数なし〕)
- V. Rose, Aristoteles Pseudepigraphus, 1863, rep., Olms, 1971 (Rose).
- M. Schmidt, Commentatio de Theophrasto rhetore, 1839 (Schmidt).
- F. Solmsen, Die Entwicklung der Aristotelischen Logik and Rhetorik, 1929 (Solmsen).
- F. Solmsen, Demetrios περί ἑρμηνείας und sein peripatetisches Quellenmaterial, Hermes 66, 1931, S. 241-267 (Solmsen, Hermes 66).
- F. Solmsen, The Aristotelian Tradition in Ancient Rhetoric, American Journal of Philology 62, 1941, p. 35-50, p. 169-190, (Solmsen AJP 62).
- G. M. Stratton, Theophrastus and the Greek Physiological Psychology before Aristotle, 1917, reprint library (Stratton).
- H. Usener, Analecta Theophrastea, Dissertatio Philologica, Kleine Schritfen, Bd. I, 1912 (Usener).
- R. Walzer, Magna Moralia und Aristotelische Ethik, 1929 (Walzer).

- F. Wehrli, Die Schule des Aristoteles, Text und Kommentar, 1944- (Wehrli).
- U. v. Willamowitz-Moellendorf, Antigonos von Karystos, 1881 (Willamowitz).
- E. Zeller, Philosophie der Griechen, II⁴, 2 (Zeller)

この他に使用した文献は，随時，記してある。

テオフラストスの著作・断片については，次の文献を参照した。

- Theophrasti Eresii opera quae supersunt omnia, Parisiis, Didot, 1866, ed. F. Wimmer, Unveränderter Nachdrück, 1964, Minerva GmbH., 断片集成は p. 321-462 にある。註記における断片番号の言及は，Wimmer の番号付けによる。
- Theophrastus, Enquiry into Plants, A. Hort, 2 vols, 1949, Loeb.
- Theophrastus, De Causis Plantarum, B. Einarson and G. K. K. Link, 1976, Loeb.
- Theophrastus Metaphysics, with translation, commentary and introduction by W. D. Ross and F. H. Fobes, 1929 (Ross)
- Theophrastus, On Stones, introduction, greek text, English translation, and commentary by E. R. Caley and J. F. C. Richards (Caley).
- R. D. Hicks, Aristotle de Anima, 1907, rep. Arno, 1976, p. 589-596 (Hicks de Anima).
- Theophratsus, Characters of Theophrastus, R. C. Jebb, 1870, a new edition ed. by J. E. Sandys, 1909, rep. Arno, 1979 (Jebb).
- Thophrasti characteres, H. Diels, 1907, OCT.
- Théophraste caractères, O. Navarre, 1964, Les Belles Lettres.
- Bernays の上掲書
- Diels の上掲書。
- Stratton の上掲書。

なお，Paulys Real-Encyclopädie der Klassischen Altertums

Wissenschaft は，RE（巻数・頁数付記）と略記した。

— 註 —

(1) DL (=Diogenes Laertius) V 4–5, cf. Chroust 133ff.
(2) Jaeger, 116, 1).
(3) ibid, 333.
(4) Chroust, 145ff.
(5) 『性格論』は彼の死後まとめられたスケッチ集である（Jebb, 16–17)。『形而上学断片』は，断片ではなく，小著と見做される（Ross, X.)。その他，『石について』，『風について』，『気象の兆候について』，『火について』，『臭いについて』，『感覚と感覚されるものについて』などが比較的まとまった内容を伝えている。
(6) Brandis, 372, T. Gomperz, The Greek Thinkers 4, 498., Zeller, 809.
(7) Regenbogen, RE 1419.
(8) Ross, XXV.
(9) Hicks de Anima, 594–96.
(10) Regenbogen, RE 1469–1472.
(11) Cicero, ad Att. Ⅱ 16, 3., Zeller, 858.
(12) Brandis, 361, 357–58.
(13) この点を明らかにした論文として F. Dirlmeier, Die Oikeios Lehre Theophrasts, 1937, Philologus, Suppl. 30, 1, pp. 4–46. がある。
(14) F. Dirlmeier, ibid. pp. 12–19.
(15) DL V 37, Athenaeus, IV 130d.
古代ギリシヤの人名と地名の表記において，原則として長音符は省略した。

——Diogenes Laertius V巻 36–57 節の訳——

テオフラストス(1) は，アテノドロス(2) がその著『散策』第8巻において述べている様に，エレソスの人であり，洗濯業者メランテスの息子である。この人は，初め故国で同郷人アルキッポスに学んだ。後にプラトンに学び，（やがてこの人から離れ）アリストテレスの所へ行った(3)。アリストテレスがカルキスに隠退して，彼が第114オリンピア紀に学派を継いだ。アマストリスのミュロニアノス(4)がその著『歴史人物対比録抄』第1巻において述べている様に，ポムピュロス(5) という名の彼の奴隷も哲学者であったといわれる。テオフラストスは，非常に聡明で勤勉

な人であり，パンピレ(6)がその著『備忘録』第32巻において述べている様に，喜劇作家メナンドロス(7)の師であった。彼はまた，面倒見がよく誰とでも議論を好む性質の人であった。カッサンドロス(8)は彼を引見し，プトレマイオス(9)は彼の所へ使いを送った。彼はアテナイの人にたいへん重んじられていたので，ハグノニデス(10)が不敬虔の罪(11)で彼を公訴する挙に出た時は，〔逆に〕訴訟に敗れ，危く罰金を科せられるところであった(12)。二千人余りの人々が彼の講義を聴きに通った。ペリパトス派のファニアス(13)に宛てた書簡において，この人は特に講義(14)について語っている。「多人数の聴衆の心をつかむことは言うに及ばず，望みに適った少人数の集まりでさえ，その心をつかむことはたやすいことではない。だが，講義は著作の改善をもたらす。当今の青年たちは，どんなことについてもそれを引き延ばしたり無視したりすることに耐えられないのだ。」(15) 彼はこの書簡の中で（自分を）学者と呼んだ(16)。

このような人であったにもかかわらず，しばしの間，この人は他の哲学者たちと共に（アテナイを）去ることになった。アムピスクレイデスの子ソフォクレス(17)が，評議会や民会の許可なくして哲学者が学校を主宰すること能わず，之に反すれば死刑という法律を提案したためである。しかし，フィロン(18)がソフォクレスを違法な提案をしたとの事由で公訴(19)したおかげで，彼らは翌年すぐに戻れることになった。その時，アテナイの人々は，その法律を無効にし，ソフォクレスに5タラントンの罰金を科した上で，テオフラストスも（アテナイに）戻って従来通りの生活ができるようにと，哲学者たちの帰還のために投票したのである。アリストテレスは，テュルタモスと呼ばれていたこの人がいかにも神々しい話し方をするので，テオフラストスと改名してやった(20)。この人は，アリスティッポスがその著『昔の人々の逸楽』(21)第4巻で述べている様に，教師でありながらアリストテレスの息子ニコマコス(22)と愛人関係にあった。アリストテレスは，既に述べられた様に，クセノクラテス(23)と彼自身を比べてプラトンが言った(24)のと同様の事を，即ち一方には轡が，他方には拍車が必要であるという事を，この人とカッ

リステネス[25]について語ったといわれる。テオフラストスはずばぬけて鋭敏で考えた所を余す所なく正確に表現するのに比べ，カッリステネスは鈍重で無器用なたちであったためである。アリストテレスの死後，ファレロンのデメトリオス[26]と懇意であった関係で，彼はこの人の助力で個人の庭園を取得したといわれているが，[27]この人には次の箴言がある。曰く，「秩序なき議論よりも手綱なき馬を信じるべきである」。また，酒宴の席で黙して語らぬ人に彼は言った。「君に学がないのなら賢明な振舞いだが，教育を受けているのなら愚かなことだ」，と。常々，彼は時間こそ最も高価なものだと言っていた。

彼は長寿に至って85歳の生涯を終えたが，それは仕事をやめて程なくのことであった。我々は彼に次の句をよせる[28]。

このことば　うまい具合に
いわれたものよ　さる人に
知恵の弓　緩めばすぐに　くだけ折る
まこと　勤勉暮らしのテオフラストス
しっかりしていた足腰も
隠退するとたちまちに
萎えてしまって　あの世行き

何か言い遺しておくことはないかと弟子たちに尋ねられて，彼は次のように答えたといわれる。「特にないが，このことだけは言っておく。人生はその名声の故に多くの見せかけだけの喜びを（我々に）与えるものだ。我々は生き始めようとするその時に死んで行くのである。だから，名声を愛することほど無益なことはない。達者でいなさい。そして忠告するが，苦労ばかりだから，私の説教は放っておくか，それをしっかり守るかしたまえ。その時の名誉は大きいものだから。人生は有益に見えてもそれより一層虚しいものなのだ。もはや私には為すべきことを論ずるいとまはない。君たち自身でそのことを探究してくれたまえ[29]」。このように語って彼は息を引き取ったといわれる。そして，伝えられる所によれば，アテナイの人々はこの人を尊敬していたので，こぞってその

葬列に加わったとのことである。老年になって彼は籠で運ばれたとファボリノス[30]はいう。彼によれば，このことをヘルミッポス[31]がいっており，そして，この人は，ピタナイオスのアルケシラオス[32]がキュレネのラキュデス[33]にあてて書いた言葉を引用しているとのことである。

彼もまた，非常に膨大な数の著作を残した。まことに優れたものであるから，それらも記しておくべきだと思う。それらは次の通りである[34]。

1 分析論前書 3巻
2 分析論後書 7巻
3 推論の分析について 1巻
4 分析論要綱 1巻
5 トポスの還元 2巻
6 争論的論法の理論に関する論争
7 感覚について 1巻
8 アナクサゴラスに対して 1巻
9 アナクサゴラスの教説について 1巻
10 アナクシメネスの教説について 1巻
11 アルケラオスの教説について 1巻
12 塩，ソーダ，ミョウバンについて 1巻
13 石化物について 2巻
14 不可分の線分について 1巻
15 講義 2巻
16 風について 1巻
17 徳の種類 1巻
18 王制について 1巻
19 王の教育について 1巻
20 生活様式について 3巻
21 老年について 1巻
22 デモクリトスの天文学について 1巻

23 気象学 1巻
24 エイドーロン（似像）について 1巻
25 臭い，色，肉について 1巻
26 宇宙について 1巻
27 人間について 1巻
28 ディオゲネスの教説の集録 1巻
29 定義 3巻
30 エロース論 1巻
31 エロースについて再論 1巻
32 幸福について 1巻
33 種について 2巻
34 癲癇について 1巻
35 神憑りについて 1巻
36 エムペドクレスについて 1巻
37 エピケイレーマタ（弁論術的拡大推論） 18巻
38 異議集 3巻
39 本意の行為について 1巻
40 プラトンの国家篇要綱 2巻
41 同種の動物における声差異について 1巻
42 突然現われるものについて 1巻
43 咬む動物と刺す動物について 1巻
44 妬み深いといわれる動物について 1巻
45 乾燥地に分布する動物について 1巻
46 体色を変化させる動物について 1巻
47 冬眠する動物について 1巻
48 動物について 7巻
49 アリストテレス的な「快楽について」 1巻
50 快楽について再論 1巻
51 命題集 24巻

52 温と冷について　1巻
53 めまいについて　1巻
54 汗について　1巻
55 肯定と否定について　1巻
56 カッリステネスまたは哀別について　1巻
57 疲労について　1巻
58 運動について　3巻
59 石について　1巻
60 ペストについて　1巻
61 失神について　1巻
62 メガラ派　1巻
63 憂鬱症について　1巻
64 金属について　2巻
65 蜜について　1巻
66 メトロドロスの教説の集録　1巻
67 気象学　2巻
68 酩酊について　1巻
69 アルファベット順による法律集　24巻
70 法律集要綱　10巻
71 定義によせて　1巻
72 臭いについて　1巻
73 酒と油について
74 第一前提集　18巻
75 立法家　3巻
76 政治学　6巻
77 時宜から見た政治論　4巻
78 ポリスの慣習　4巻
79 最良の国制について　1巻
80 問題集　5巻

81 諺について 1巻
82 凝固と溶解について 1巻
83 火について 2巻
84 気息について 1巻
85 中風について 1巻
86 窒息について 1巻
87 精神錯乱について 1巻
88 感情について 1巻
89 気象の前兆について 1巻
90 詭弁 2巻
91 推論の解除について 1巻
92 トピカ 2巻
93 懲罰について 2巻
94 毛髪について 1巻
95 借主制について 1巻
96 水について 3巻
97 睡眠と夢について 1巻
98 親愛について 3巻
99 名誉心について 2巻
100 自然について 3巻
101 自然学説誌 18巻
102 自然学説誌要綱 2巻
103 自然学 8巻
104 自然学者たちに対して 1巻
105 植物誌 10巻
106 植物原因論 8巻
107 樹液について 5巻
108 虚偽の快楽について 1巻
109 魂について，一つの命題

110 非技術的立証について　1巻
111 単純な難問について　1巻
112 和声論　1巻
113 徳について　1巻
114 論点の反論　1巻
115 否定について　1巻
116 格言について　1巻
117 可笑しな事について　1巻
118 午後の講義　2巻
119 分割　2巻
120 差異について　1巻
121 犯罪について　1巻
122 中傷について　1巻
123 称賛について　1巻
124 経験について　1巻
125 書簡　3巻
126 自然発生する動物について　1巻
127 分秘について　1巻
128 神々への頌歌　1巻
129 祭式について　1巻
130 幸運について　1巻
131 エンチューメーマ（弁論術的推論）について　1巻
132 発見について　2巻
133 倫理学講義　1巻
134 性格論　1巻
135 喧騒について　1巻
136 歴史（ヒストリア）について　1巻
137 推論の判定について　1巻
138 海について　1巻

139 へつらいについて　1巻
140 カッサンドロスに贈る「王位について」　1巻
141 喜劇について　1巻
142 〔韻律について　1巻〕
143 文体について　1巻
144 論法集録　1巻
145 解除集　3巻
146 音楽について　3巻
147 韻律について　1巻
148 メガクレス　1巻
149 法律について　1巻
150 法律違反について　1巻
151 クセノクラテスの教説と集録　1巻
152 交際論　1巻
153 誓言について　1巻
154 弁論術の規則　1巻
155 富について　1巻
156 詩学　1巻
157 政治学，自然学，恋愛術，倫理学の諸問題　1巻
158 序論集　1巻
159 諸問題集録　1巻
160 自然学の諸問題について　1巻
161 例証論法について　1巻
162 提題と陳述について　1巻
163 詩学再論　1巻
164 智者について　1巻
165 忠告について　1巻
166 破格語法について　1巻
167 弁論術について　1巻

168 弁論術について，17種類
169 演技について　1巻
170 アリストテレスまたはテオフラストスの研究草稿集　6巻
171 自然学説誌　16巻
172 自然学説誌要綱　1巻
173 優美さについて　1巻
174 〔性格論　1巻〕
175 偽と真について　1巻

176 神に関する研究の歴史　6巻
177 神々について　3巻
178 幾何学史　4巻
179 アリストテレス動物論の要綱　6巻
180 エピケイレーマタ（弁論術的拡大推論）　2巻
181 命題集　3巻
182 王制について　2巻
183 原因について　1巻
184 デモクリトスについて　1巻
185 〔中傷について　1巻〕
186 生成について　1巻
187 動物の知性と習性について　1巻
188 運動について　2巻
189 視覚について　4巻
190 定義に寄せて　2巻
191 「与えられている」という事について　1巻
192 より大とより小について　1巻
193 音楽について　1巻
194 神的幸福について　1巻
195 アカデメイア派の人々に対して　1巻
196 哲学の勧め　1巻

197 いかにすれば国家は最善に治められるか　1巻
198 研究草稿集　1巻
199 シケリアの溶岩流について　1巻
200 一般通念について　1巻
201 〔自然学の諸問題について　1巻〕
202 認識の方法にはいかなる種類があるか　1巻
203 嘘つきについて　3巻
204 トピカ序　1巻

---

205 アイキュロスに寄せて　1巻
206 天文学　6巻
207 増大についての算術的研究　1巻
208 アキカロス　1巻
209 法廷弁論について　1巻
210 〔中傷について　1巻〕
211 アスチュクレオン，ファニアス，ニカノル宛書簡集
212 敬虔について　1巻
213 エウイアス　1巻
214 時宜について　2巻
215 対象に適合した理論について　1巻
216 子供の教育について　1巻
217 同上その二　1巻
218 教育について，或いは徳について，或いは節制について　1巻
219 〔哲学の勧め　1巻〕
220 数について　1巻
221 推論の言葉使いに関する定義　1巻
222 天体について　1巻
223 政治に関して　2巻
224 自然について
225 果実について

これらは締めて二十三万二千八百八行になる。したがって，この人の著作もこれほどの数に昇っているのである。

私は彼の遺言書を発見した(35)。その内容は次の通りである。

「万事順調に行くように。万一の場合，以下のことを遺言しておく(36)。家にある財産はすべてレオン(37)の息子たち，メランテスとパンクレオンに譲る。ヒッパルコスへの貸付金(38)から次の事が為されるよう望む(39)。まず，ムーサの社殿(40)とその女神たちの像を完全に再建すること(41)，そして女神たちの像をより美しく飾るのに効果のあることが何かあればそれもすること。次に，アリストテレスの肖像と，以前から社殿(40)にあった奉納品を再びそこへ安置すること。その次に，ムーサの社殿に隣接する小柱廊(42)を以前に劣らぬさまで建てること。そして地図が書き込まれている板を下座の柱廊(43)に立てること。また，祭壇も完全で優美な姿になるよう修復すること。更に，ニコマコス(44)の等身像が完成されるよう望む。その像の彫塑費用だけはプラクシテレス(45)に支払ってあるので，他の費用は上記の金から支払われること。その像は，遺言書の他の記載事項も合わせて執行する人々によいと思われる場所に置かれること。社殿と奉納品に関わることは，以上のようにされたい。スタゲイラにある私の地所(46)はカッリノス(47)に譲る。蔵書はすべてネレウス(48)に譲る。庭園(49)と散歩道(50)及び庭園に隣接するすべての家屋は，皆が常にそこに滞在していることができないので，下記の友人たちの内で，そこで共に研究し共に哲学することを望む人々に譲る。その際の条件は，彼らがそれらを譲渡したり，私物化したりはしないで，神殿の様に共有し，互いに同胞・友愛の精神で使用することである。このことは，彼らにとって相応しく正しいことなのである。共同体の成員は，ヒッパルコス，ネレウス，ストラトン，カッリノス，デモティモス，デマラトス，カッリステネス，メランテス，パンクレオン，ニキッポスとする(51)。もし哲学することを望むのなら，メトロドロスとピュティアスの子アリストテレス(52)にもこの仲間に加わることが許さ

れる。この仲間の最年長の人たちは，彼が哲学において最大限の指導と援助を受けられるよう万全の配慮をされたい。庭園の中で最も相応しい所に私を埋葬し(53)，葬儀や墓碑については，無駄な経費を慎むこと(54)。既に同意されているように，ポムピュロスも（上記の仲間と一諸に），社殿，墓碑，庭園，散歩道の手入れについて，彼自身その近くに住み，そして以前からの事も行ないながら，気を配ること。それらを所有する人たちは，彼の利益について配慮されたい。ポムピュロスとトレプテス(55)は，昔から自由の身であって，私に十分尽くしてくれた。以前彼らが私から受け取った分と彼らが自分で取得した分，そして，今私がヒッパルコスから彼らに支払われるよう定めておいた二千ドラクマとは，彼らの所有に確実に帰すべきものであると思う。このことについては，私自身何度もメランテスやパンクレオンと話し合いをし，彼らは全面的に私に同意したのである。彼らには女召使ソマタレを譲る。召使の中でモロンとティモンとパルメノンは直ちに自由の身とする。マネとカッリアは，四年間庭園に留まって共に働き，誤った行ないをしなくなったら，自由の身とする。家財道具の中で遺言執行人たちがそうしてよいと思うものはポムピュロスに譲り，残りは現金に替えること。デモティモスにはカリオンを譲り，ネレウスにはドナックスを譲る。が，エウボイオスは売られること。ヒッパルコスはカッリノスに三千ドラクマを与えよ。ヒッパルコスがメランテスやパンクレオンのために，そして以前には私のために尽くしてくれたこと，そして，彼が現在自分の財産状態において危機に直面していることを，もし知らなかったとしたら，私は，彼にメランテスやパンクレオンと一諸に遺言を執行するよう命じたことであろう。しかし，私の見たところでは，遺言の共同執行は彼らにとってやさしいことではないようだし，また，私の判断したところでは，それよりも，彼らには，決まった分をヒッパルコスから受け取る方が得なのであるから，ヒッパルコスはメランテスとパンクレオンにそれぞれ一タラントンを与えること(56)。それから，遺言執行人たちにも，ヒッパルコスは，遺言記載事項の執行にかかる費用（に充当する金額）を各事項の支

払い期限に合わせて支払うこと。以上の事を執行してしまったら，ヒッパルコスは私に対する債務の一切から放免されること。ヒッパルコスがカルキスにおいて私の名義で貸したものがあるなら，それは彼のものである。遺言記載事項を執行するのは，ヒッパルコス，ネレウス，ストラトン，カッリノス，デモティモス，カッリステネス，クテサルコスとする。テオフラストスの印が押してある遺言書の写しの一つは，ヒッパルコスの息子ヘゲシアの所にある。証人は，パッレネ区のカッリッポス，エウオニュモン区のフィロメロス，ヒュバダイ区のリュサンドロス，アロペケ区のフィロンである。もう一つの写しをオリュムピオドロスが持っている。証人は上と同じ人々である。さらにもう一つの写しがあり，これをアデイマントスが受け取った。息子のアンドロステネスが彼の所へ持って行ったのである。証人は，クレオブロスの息子アリムネストス，フェイドンの息子タラスのリュシストラトス，アルケシオラスの息子ラムプサコスのストラトン，テシッポスの息子ケラメイス区のテシッポス，ディオニュシオスの息子エピケフィシア区のディオスクリデスである。」

彼の遺言書は以上の通りである。

医者のエラシストラトス[57]も彼に学んだという人々がいるが，多分そうである。

〔訳註〕

(1) Th（テオフラストス）の没後，ペリパトス派の学園を継いだストラトンの学頭就任は，第123オリンピア紀（DL V 58）の第一年か第二年なので，Th の没年は前288/7年か前287/6年になる。享年85歳（「性格論」序の99歳との報告は偽）であるから，生年は前372/1年か前371/0年になる。学頭を Ar（アリストテレス）から引き継いだのが，第114オリンピア紀第三年（DL V 10, V36, B. C. 323/2）だから，その時は50歳であった。後継者に関する逸話が Gellius, Noctes Atticae (N. A.) XIII 5 にある。

(2) D L の中では，III 3（プラトン），V 36, VI 81（シノペのディオゲネス），IX 42（デモクリトス）で引用されている。オクタヴィアヌス帝治下のストア哲学者。スイダスによれば，弟子たちに対する指導，感化において優れていた。cf. Zeller, 607, Anm. 652.

(3) Th がいつどこで Ar に会ったかについてはこの個所以外に資料はない。イェーガーは，二人の出会いを Ar のアッソス滞在時と推定している。そして，Ar のレスボス島ミュティレネ行きは Th の勧誘だとする。D L の記述については，これに従うと，最初 Th はアカデメイアに入学し，後，Ar と共にアッソスへ移ることになるが，これは本当らしくないとする (Jaeger 116, 1)。しかし，特に DL の記述を否定する根拠はない。前372/1年（ないし前371/0年）生まれの Th は，プラトンの死 (B. C. 348/7) の時点ですでに24歳（ないし23歳）であるからである。このことに比べ，Th のマケドニア滞在は，彼がスタゲイラに地所をもつこと (DL V 52) や彼の著書にスタゲイラに関する記述 (h. pl. III, 11, 1., IV, 16, 3) があることからみて，より本当らしいと考えられる。とすると，Ar の教えたアレクサンドロスの親友でもあるプトレマイオスとの接触もそこで当然あったであろう。Guthrie, 35, 1 も参照。

(4) この人の名と著作は DL にだけ見える (I 114, III 40, IV 8, IV 14, V 36, X 3, cf. FHG 〔Fragmenta Historicorum Graecorum, 5 vols, C. Müller〕 iv 454–5)。2世紀以前の人ではないことが名前から推定される。

(5) 初めテオフラストスの奴隷であったが，後に解放されたことが遺書（後出）から知られる。cf. Gellius, N. A. II 18, 8.

(6) ネロ帝時代には生きていたエピダウロス生まれの人。主著『備忘録』33巻の他に，『家事概要』3巻，『論争について』，『性的快楽について』などがある (cf. Suidas, *Ἀμφίλη*)。断片は，10箇所にある (DL I 24, 68, 76, 90, 98, II 24, III 23, V 36., Gellius N. A. XV, 23, 2, 17, 3)。フォティウス (Bibliotheca, 119^{b} 17–120^{a}4 Bekker, Moraux, 158–9) によれば，彼女は，夫と片時も離れず暮らした13年の間に『備忘録』を書いた。本書は，夫から学んだ事，教養のある夫の客から聞いた話，そして自分で読んだ書物からの抜萃をまとめたものである。歴史，金言，弁論術，哲学，詩などに関する記事が雑然と並ぶが，文体は，面到な思想を含まない女性特有の簡素なものだという。

(7) 「ディオペイテスの子，ケピシア区の人メナンドロスは，ソシゲネスのアルコーンの時に生まれ，ピリッポスのアルコーンの時，プトレマイオス・ソーテールの32年に，52歳で死んだ」とローマ出土の碑文 (IG XIV 1184) に記されているが，これによれば，生年が前342/1年，没年が前293/2年となる。ところが，これでは享年はせいぜい50歳であるので，ケルテは，前293/2年は上演番付に名前の載った年と考え，没年を前291/0年にする。彼によれば，他の資料によって生年は確定しているが，生年を変える学者もいる (RE XV, 709)。作品については，「ギリシア喜劇全集2」所収の呉茂一氏の解説がある。彼の教育については詳しく知られていない。テオフラストスに学んでいたころの学友ファレロンのデメトリオスとの親交が理由で，彼の没落時 (B. C. 307) に巻き添えを食って危険に直面したが，デメトリオスのいとこテレスポロスがメナンドロスを弁護したので急場から救われた (DL V 79)。ケルテは，メナンドロスが Th の『性格論』に

影響を与えたとする従来の説を否定し，これと逆の影響関係があったと主張して『性格論』の成立年代を前319年とする（メナンドロスの『気むずかし屋』は前317年の優賞作品である）。これに対して，シュタインメッツは，『性格論』の成立年代を前310年から前300年の間に置き，その書におけるメナンドロスの影響を確認する。ただし，メナンドロスには，Th の教説の影響が見られるとする。即ち，メナンドロスの中には，一度形成された性格は変わらない事，従って教育には時宜（καιρός）がある事，それから，獣の血の犠牲を否定した事などが Th の教説の影響として含まれている（P. Steinmetz, Menander und Theophrastos, Rheinisches Museum, 103, 1969, 185ff）。

(8) マケドニアの将軍アンティパトロスの長男で生年ははっきりしないが，前350年より以前ではない。アンティパトロスは，アレクサンドロスの死後（B. C. 323），実質的にマケドニアの摂政の地位にあったペルディッカスを，クラテロス，アンティゴノス，プトレマイオスと手を結んで破り，名実共に摂政の地位についた。アンティパトロスが前319年に死亡すると，マケドニアの将軍たちの間で戦争が本格化する（ディアドコイ戦争）。まず，ラミア戦争での活躍によりアンティパトロスに認められ，彼の死後，摂政の地位についたポリュペルコンを打破しようとして，カッサンドロスは，アンティゴノス，プトレマイオスらと連合して戦った。アジアでは，ポリュペルコンと手を結んだエウメネスに，アンティゴノスが対決し，これをプトレマイオスがエジプトから側面援助する形になった。ギリシャでは，ポリュペルコンとカッサンドロスの争いがつづいた。アテナイでは，ラミア戦争後，アンティパトロスの守備隊がムニュキアに駐留し，フォキオンとデマデスが寡頭政治を領いていたが，ポリュペルコンが摂政になると，アテナイの政治に干渉し，これを崩壊させた。その後，前317年ごろまで，カッサンドロスとポリュペルコンの一進一退がつづいたが，やがて前者がアテナイへ通じるすべての道を征圧した。前317年春，講和条約が成立しアテナイは港と土地の返還を条件に，マケドニア守備隊（ニカノルが隊長）のムニュキア駐留と寡頭制及びカッサンドロス支配下の執政官（ἐπιμελητής）の設置を認める。カッサンドロスは執政官にファレロンのデメトリオスを任用した（Wehrli, Heft IV. fr. 13）。この体制は若干の曲折はあったものの，前307年まで持続した。アジアにおいて，アンティゴノスは前317年にエウメネスを駆逐したが，次第に大きくなった力を背景にして，当初の目的であったマケドニア帝国統一の野望を実現しようとした。これに対抗して，カッサンドロスは，プトレマイオス，リュシマコスと連合した。かくて両陣営の戦いが各地で展開した（B. C. 315-301）。前307年に，アンティゴノスの息子デメトリオスが，アテナイを解放し，民主制を復活させた。彼は，さらに，キュプロスの海戦（B. C. 306）においてプトレマイオスを破り，制海権を握った。だが，その後，アンティゴノスのエジプト攻めも，デメトリオスのロドス攻めも共に失敗に終わり，カッサンドロスの巻き返しに道をひらいた。そして，ついに，プリギアのイプソスにおいて，アンティゴノス父子は，カッサンドロス

らの連合軍に決定的敗北を喫する（前301年イプソスの戦い）。アンティゴノスは死に，デメトリオスは敗走した。デメトリオスの失地回復は，カッサンドロスの死まで待たねばならなかった。この人は，前298/7年に没するまで，ギリシャ，マケドニアにおける地盤を固めていったのである。

父アンティパトロスがArと親しかった様に，カッサンドロスはペリパトス派の人々と親交があった。ファレロンのデメトリオスが，Arの養子で守備隊長であったニカノルを介しカッサンドロスと親交があって，前317-307年，アテナイの実権を委ねられたことは，注26を参照。この父子は，共に寡頭政を支持し厳しい支配を行なったが，カッサンドロスには高い教養があったという（Athe. XIV 620b）。cf. RE, X, 2293-2313.

(9) マケドニア人ラゴスの息子（前360年を少し過ぎた頃に生まれ，前283年に死す）。母アルシノエの腹に孕ませたのはフィリップⅡ世である，即ち，プトレマイオスはアレクサンドロスの異母兄弟であるとの伝承もあるが，それはとにかく，彼は，宮廷侍童として幼いころからアレクサンドロスに付き随っていた（RE, XXIII, 1603-4）。アレクサンドロスの仲間（ἑταῖρος）と見做され，前337/6年，追放されたが，アレクサンドロスが王位に就くと帰国し，遠征には従軍し大いに活躍した。晩年にこの遠征の歴史を執筆した（FGrH=Fragmente der griechischen Historiker, 138, Komm. p. 499）。これは，アリアノスの『アナバシス』の資料になったものだが現存しない。アレクサンドロスの死後，前323年エジプト太守になったが，後継者の中で彼だけが，最初から，大王の全領土の統一継承を放棄していた（分離派，RE, XXIII, 1608）。後継者戦争については注(8)を参照。前304年，自ら王を名乗り，その後東地中海一帯に領土を拡げた。カッサンドロスの死後（B. C. 298），ファレロンのデメトリオスを受け入れ（注26），彼の助言によってアレクサンドリアに学問研究所ムーセイオンを設立した（Frazer, I, 314-5）。同じく彼の助言によって図書館設立計画を立てたが，実行はプトレマイオスⅡ世の手に委ねられた（Frazer, I, 321）。プトレマイオスは，息子の教育のために，Thへ使者を送ったものと推定される。Thの弟子ストラトンがその息子の家庭教師をしている（DL V 58）。

(10) 職業的告発家，民衆煽動家。ラミア戦争後，322年，アンティパトロスのアテナイ侵攻に際し追放されるが，フォキオンの仲介によって他の政治家と共にペロポネソス半島に留まる。前319年，アンティパトロスが死に，アテナイで民主派の力が強まると帰国。前318年，カッサンドロスとポリュペルコンのアテナイ占領合戦の最中，フォキオン死刑の提案を民会で通過させる。テオフラストを不敬虔で訴えたのは前317年と315年の間と推定される（Derenne 201）。

(11) 宗教関係の訴訟として，「不敬虔」を事由にした γραφή（εἰσαγγελία の場合もある）の他に，祭式違反に関わる προβολή がある（後者については，アリストテレス全集17『アテナイ人の国制』43章及び p. 406 の注(7)，MacDowell, 194-5 を参照）。「不敬虔 ἀσέβεια」とは，Ps-Ar., de virtutibus et vitiis 1251a31 によ

れば，「神々や神霊，あるいは故人・両親・祖国に関する（伝来の習慣の）違背」と定義されるが，前5世紀後半における思想上の激動期以来アテナイでは，哲学者たちが無神論という形の不敬虔の罪で訴えられてきた。主な人として，前5世紀では，アナクサゴラスとプロタゴラス（いずれも告発者の敗訴に罰則がない εἰσαγγελία による）が，前4世紀では，ソクラテス（前399年），アリストテレス（前323年，実際には行われなかった），テオプラストス，スチィルポン（前320年以降の年），テオドロス（前317と前307年の間の年）が挙げられる（Derenne の書を参照）。

(12) 公訴（その種々の形式のリストは MacDowell, 58）において告発者が5分の1以下の評決しか獲得できない場合，もしくは訴訟を途中で取り止めた場合，1000ドラクマの罰金を払う義務があった。そして，その人は当該の公訴を行なう権利を剝奪された。罰金を払えない場合はポリスへの債務者となり，全ての市民権を剝奪された。εἰσαγγελία などの例外については MacDowell, 64を参照。

(13) スイダスによれば，ファニアスかファイニアスとなっているが，後者の方がよい（cf. RE, XIX, 1565）。第111オリンピア紀（B. C. 337/6-334/3）以降アレクサンドロス時代（B. C. 336-323）に生きていたとあるが，第111オリンピア紀が盛期（アクメー）（40歳頃）であろう。とすると，同郷の Th と同世代である（Wehrli, Heft IX 27）。ファイニアスがアテナイにいた確かな証拠はないが，彼は，Ar の弟子であるから，Ar のアッソス・ミュティレネ時代だけにとどまらず，アテナイに学校を開いてからも Ar と交渉をもったであろう。同郷の二人がエレソスの僭主を打倒したとの報告がある（fr. 7 Wehrli）が，その時（B. C. 334），Th はアナナイに，ファイニアスはレスボスにいたと推定される（cf. Wehrli, 28）。著作としては，論理学関係（fr. 8 Wehrli）の他，「植物論」や僭主論関係のものがある（FHG II 293., Wehrli, Heft IX, 9-21）。プルタルコスは彼を「哲学者にして歴史に詳しい人」（Solon, 14）と評した。彼の記述の仕方は，個人的資質（たとえばテミストクレスの名声欲）からその政治行動を説明するものである（RE, XIX, 1688-90）。

(14) 書簡の内容から見て，「δικατηρίου（裁判所）」では意味がとれないので，アーペルト（διδακτηρίου）やワイズ（διδασκαλίου）の修正を受け入れねばならない。いずれも「講義」と訳せる。Hicks, 484 や Long, 215 の校訂及び Apelt, 333 を参照。

(15) アーペルト（Apelt, 333）は，この書簡断片は教授の困難さとその苦労を表明しているとみる。ヒックス（Hicks, 484）は，講義の効用を説くとする。レーゲンボーゲン（RE 1359）は，αἱ ἡλικίαι を，アーペルト，ヒックスの様に「現在の青年たち」とは解さず，「寄る年波」と解する。つまり，書簡は自著出版の焦りを表明したものと解する（cf. Wehrli, Heft IX, 27）。彼の解釈によれば，「私のこの年令では，何事についても延期することやそのままにしておくことにはもはや耐え得ないのだ（今，出版しなければいけない）」という訳になる。

(16) ヒックス (Hicks, 485) は, *ὠνόμακε* の目的語として some one を補い,「或る人を学者と呼んだ」と解する。アーペルト (Apelt, 333) は内容的にも文法的にも疑わしい文だとする。レーゲンボーゲンは目的語として sich selbst を補い, 次の文とのつながりを示す。彼によれば,「このような人であったにもかかわらず云々」の文は,「学者であったにもかかわらず, 学問の自由に対する介入に際し, 自らの所信を公けにしたがために追放された」という意味になる (RE, 1359)。ヒックスに従えば,「アテナイの人々にこれほど人気があったにもかかわらず追放された」という意味になる。

(17) 前307年, デメトリオス・ポリオルケテス (*πολιορκητής* 町々の攻囲者, 岩波文庫プルターク英雄伝 11, p. 8 を参照) がアテナイを攻略し, カッサンドロスの守備隊が撤退して, ファレロンのデメトリオスがテバイへ逃れたあと, スニオン出身のこの人が, マケドニア派と見做されたペリパトス学派の追放を主な目的として, この法案を提案した。この法律について, J. Pollux, Onomastikon IX 42, ed. Bekker, pp. 368-369 にも報告がある (Lynch, 103-4., Willamowitz, 270)。上記の様に, この年には, ファレロンのデメトリオスの友人メナンドロスも危険に晒されている。この法律の提案年については, Derenne, 214(1) を参照。

(18) 遺言書 (D. L V 51-57) にも見えるアロペケ区出身のフィロン (V 57)。Ar の弟子である。アテナイ人の資格で, ソフォクレスを *παράνομα* (次註) で公訴した。ソフォクレスはデモステネスの甥デモカレスの弁護を受けたが敗訴した (Athenaeus, XIII, 610e, 508f)。

(19) *γραφὴ παρνόμων*, 法案の提案者は, それが現存の法に形式においても内容においても背馳しないよう注意しなければならないが, 背馳があった時は, 告発 (公訴) された。告発者が誓言 (*ὀπωμοσία*) すると, すぐ件の提案は, 既に民会を通過したものであっても保留にされた。告発者が勝てば, 提案者は, 通常, 罰金刑に処せられ, 提案は無効となる。三度 *παράνομα* で有罪になると市民権を失なう (MacDowell, 50)。今の場合, 哲学者たちの国外退去は危険を避けるためだったと思われる。*παράνομα* の内容について, ヴィラモーヴィッツは, アテナイの学校が *θίασος* という宗教結社であって, その法的地位をソフォクレスが侵害したと解釈した (Willamowitz, 271-2)。これに対し, リンチは, アテナイの学校は *θίασος* ではなかったとし, ソフォクレスの提案はアテナイにおいて一般に認められていた自由結社の権利を侵害したので, 彼は *παράγομα* で訴えられたとした (Lynch, 117ff)。

(20) スイダスによれば, 神の如く話す故に, Ar によって, 初め *Εὔφραστος*, ついで *Θεόφραστος* と呼ばれた。同様の報告がキケロ, クィンティリアヌスにもある (Cicero, De Oratore 19, 62, divinitate loquendi., Quintilianus, Institutiones Oratoriae X, I, eloquendi nitor ille divinus)。ブランディスはこれらの報告を疑う (Brandis, 251)。

(21) 前3世紀, 没落の道をたどるアテナイでは, 偉大なものや倫理的なものに対する

一般的嫌悪感が広がっていた。また，当時アルケシラオスの力量によって論戦的アカデメイアが台頭していた（B. C. 250–30)。この書は，前3世紀後半におけるこの様な状況の中で，特にアカデメイアを嫌った人物によって編まれた哲学者性愛録とでも言うべきものであるが，著者は，テオフラストス（B. C. 372/1–288/7）やポレモン（B. C. 276没）に言及しているので，キュレネのアリスティッポス（B. C. 435–350）ではない。cf. Willamowitz, 48–53.

(22) Ar の庶子。Ar の遺書では，未成年のニコマコスの後見人に Ar の甥ニカノルが指名されたが，彼が前317年にカッサンドロスによって謀殺されたため，Th が育てた（Ar の遺書には Th への依頼がある，DL V 12)。アリストクレスによれば，彼は若くして戦死した（apud Eusebius, praeparatio evangelica XV 2, 15, 793)。従って，スイダスにおける，「哲学者であり『ニコマコス倫理学』，『父の自然学講義について』を残す」との記述は疑わしい。

(23) カルケドン生まれ，アガテルノの子。若い頃からプラトンに学び，プラトンの死（B. C. 348/7）後，Ar と共にアッソスに招かれ，ヘルミアスの死（B. C. 341）の年までそこに留まり，その後カルケドンに戻る（RE, Zweite Reihe IX, 2, 1512)。前339年，病床のスペンシッポスがクセノクラテスを学頭にと呼び戻す（DL IV 3)。スペウシッポスに従ったわけではないが，学員らはクセノクラテスを学頭に選出する。以後，前314年に没するまでその任にあった。厳格な性格で優しさには欠けていたが，信望厚く，前322年，アンティパトロスとの交渉に際し，外国人ではあったが，フォキオンらと共に派遣された。彼は，守備隊駐留を認める妥協に最後まで反対し，自由ギリシャの精神を示した（Plut., Phocion 27)。後日，市民権授与の申し入れに対し，アテナイの現在の政策には加われないとして拒否した（Plut., Phocion 29)。哲学的には，プラトンの百科全書的体系化を試みたが，倫理学の実用にも関心があった。

(24) DL IV 6 に次の記述がある。「彼（クセノクラテス）は生まれつき鈍間であった。それでプラトンは，彼と Ar を比較して語った，『一方には拍車が，他方には轡が必要だ』，また，『私は一方をウマの如くに，他方をロバの如くに駆る』，と。」

(25) Ar の姪ヘロの息子でオリュントス出身。父はデモティモスかカッリステネス。オリュントスは前348年にフィリップスⅡ世によって破壊されたので，カッリステネスは Ar に育てられた。Ar のアッソス時代（348/7–345/4）に既に同行していると推定されるが，それは，彼が，アッソス時代の後援者ヘルミアスの死（B. C. 341）に際し，賞徳文を寄せているからである。アッソス時代20歳とすれば，生年は，前367年前後になる（Chroust, 83–4., Brown, Callisthenes and Alexander, AJP LXX. 3, 1949, pp. 226–228)。Ar のマケドニア行にも同行し，Ar がそこを離れたあとも，ペラの宮廷に留まる。前334年，アレクサンドロスの遠征に加わるが，その役割は，歴史家として遠征記録を残すことであった。既にそれ以前に，彼は，Ar の指導の下で『ピュティア競技における優勝者リスト』を作成し，第三次聖戦についても書いている。その他多くの著作を著した

が，名声を高めたのは，『ヘレーニカ』(ペルシャ王アルタクセルクセスとギリシャ人との和平 (B. C. 387/6) 以降，フォキス人フィロメルスのデルフォイ神殿強奪までの30年史) である。遠征中，大王に「へつらう」ことなく，「遠慮なく自由な立場で話した」(DL V 5) 彼は，平伏を拒否したことから王の反感を買い，ほどなくヘルモラオスの陰謀事件に連座し処刑された (B. C. 327)。獄中病死説もあり，第一次報告者の間でも政治的意図の違いから異なった報告が見られるという。Ar は処罰の不当性を感じながらもカッリステネスにも責任の一端があるとして沈黙を守ったが，Th は，アッソス時代以来の親友の死を嘆き，『カッリステネスまたは哀別について』を書いてアレクサンドロスを非難した。カッリステネスは，自然現象にも興味をもち，遠征先からリュケイオンの学園へ資料や報告を送った。cf. RE, X, 1674-1726

(26) ファノストラトスの子で，アテナイの外港ファレロンの生まれ (DL V 75, Suidas) である。家柄はあまりよくない (DL V 75-6)。彼は，ハルパロスがアレクサンドロスからのがれアテナイに到着した時 (B. C. 324) に，政治の世界に足を踏み入れた (DL V 75)。政治参加は18歳以上であるから，彼の生年は前342年以前ということになる。Th に学び，メナンドロスやデイナルコスの知遇を得ている (Suidas, DL V 75, V 79., Wehrli, Heft 4, fr. 2)。彼はフォキオン派に参加し，民主制に反対した (Wehrli, fr. 10, fr. 11)。前319年における民主派によるフォキオン派弾圧の時には，彼はカサンドロスのペイライエウス守備隊長ニカノルの下へ逃れている。カッサンドロスによるアテナイ外港占領 (B. C. 318) につづく講和交渉において，彼はカッサンドロスの指名を受け，アテナイの執政者 ἐπιμελητής となった。その執政は10年に及んだが，彼は，アテナイの人々のぜいたくを押え，収入と建築においてポリスを成長させた (DL V 75., Ath., XII 542e)。カッサンドロスの支配の下で平和と繁栄をもたらした彼の治政は，Ar の政治学の適用を試みたものといえる (cf. RE, IV, 2827-28)。前307年に，アンティゴノスの息子デメトリオスが「ギリシャの自由」を掲げて，アテナイを占領した時，彼の治政は終わった。テーバイへ逃れ，そこでキュニコス派のクラテスと交わる (Wehrli, fr. 50, fr. 58a, fr. 58b)。前297年にカッサンドロスが死ぬとアンティゴノスを恐れ，カッサンドロスと友好関係にあったエジプトのプトレマイオスの下へ逃れた (DL V 78)。プトレマイオスは，彼のアテナイにおける実績を評価し，立法府長官に任命した (Wehrli. f. 65, Kommentar p. 55)。彼は，プトレマイオスの生前において，フィラデルフォスにではなく，腹違いのもう一人の息子 (アンティパトロスの娘エウリュディケに生ませた子) に王権を委譲するよう勧告したが，聞き入れられなかった。フィラデルフォスの即位後，彼はこの人の命令によって田舎に監禁されていたところ，毒蛇にかまれて死んだと言われる (DL V 78., Wehri., fr 55, Kommentar p. 55)。政治，法律，倫理に関する著作を多く残したが，その巻・行数の量はペリパトス派随一といわれる (DL V 80)。邦語文献として，粟野頼之祐「ファレロンのデメトリオスとアレクサンドリア學府

の創建について」西洋古典学研究Ⅱがある。

(27) Th は外国人（クセノス）であって，在留外国人（メトイコス）だとしても，通常では土地と家屋の所有は許されない。ここでいうデメトリオスの仲介とは，アテナイに功績のあった外国人に授与される特典のひとつである ἔγκτησις（土地家屋所有権）の授与のことであろう。この権利によってアッテカ地方における土地と家屋の所有が認められるのであるが，Ar はこの権利を有していなかった。Th による庭園取得によって，はじめてアペリパトス学派としての自然的土台が据えられたわけである（Lynch, 98-99., MacDowel, 78)。Lynch への反論として Guthrie, 39 がある。

(28) DL にエピグラムは全部で52含まれるが，I 39, I 63, VIII 75, IX 43 の記述から，「πάμμετρος」という名称のエピグラム集（ないしその第1巻）が既に DL の手で作られていたことがわかる。このエピグラム集の全てが DL の自作であるか，それとも他の詩人の作も含まれているか，確定できない。52の内31が「ἐλεγεία の繰り返し」であり，この作もその中に含められる。他の21は19の異った韻律で作られている（J. Mejer, Diogenes Laertius and his Hellenistic Background, Hermes, Einzelschriften, Heft 40, 1978, pp. 46-48)。Anthologia Palatina, vii, 110 にこのエピグラムが集録されている（Loeb. The Greek Anthology, vol. II)。このエピグラムの韻律は次の様になる。

οὔχ ἅρα | τοῦτο μά | ταιον ἔ | πος μερό | πων τινὶ | λέχθη
— v v | — v v | — v v | — v v | — v v | — —
ῥήγνυ | σθαι σοφί | ης ‖ τόξον ἀ | νιέμε | νον·
— — | — v v | — ‖ — v v | — v v | v
δὴ γὰρ | καὶ Θεό | φραστος ἔ | ως ἐπό | νει μὲν ἄ | πηρος
— — | — v v | — v v | — v v | — v v | — v
ἦν δέμας |, εἶτ' ἀνε | θεὶς ‖ κάτθανε | πηρομε | λής.
— v v | — v v | — ‖ — v v | — v v | —

(29) おそらくヘルミッポスに由来すると思われるこの辞世の句の主意は，人々から名声を勝ち得た人生も所詮は短く虚しいものであるということにある。καταλαζονεύεται はアンブロシウス訳 mentitur (Hübner 341)，アーペルト訳 vortäuscht (Apelt 229) を採り，「本当らしく見せかける」と解する。ヒックス訳 life boasts は，「見せかけの喜びを与えられた我々がその喜びを誇る」ということか？ Liddle & Scott, I, 3, depreciate invidiously には賛成できない。

(30) ガリア地方アルレアトスの出身で，150年頃没している（生年は80～90年)。哲学にも従事したが，むしろ博学な弁論家として活躍した。ゲリウスは，彼のローマ時代における信奉者である。彼はプルタルコスとも交際し，自著を献じている。哲学的にはアイネシデモスの影響でピュロニズムを信奉したが，自らをアカデメイア派に数えている。著作は，スイダスによれば，『ホメロスの哲学について』，『プラトンについて』，『ソクラテスとそのエロスの術』，『哲学者たちの生活について』，『金言集』などがある。

(31) スミルナ生まれで，カリマコスの弟子（ὁ Καλλιμάχειος, Athe, II 58f.）と呼ばれる伝記作者。盛期（アクメー）は前3世紀後半である。カリマコスが著した πίνακες τῶν ἐν πάσῃι παιδείαι διαλαμψάντων καὶ ὧν συνέγραψαν（全学芸分野における優れた人々とその著作の表）は，アレキサンドリア伝記学，とりわけヘルミッポスにとって重要な意味をもつ。多分，弟子としてこの仕事に携り，この経験を生かして自分の仕事を進めていったものと推定される。彼の大部な書『βίοι（伝記）』は，学問的なものと非学問的なものとが錯雑として交じり合っているが，後者に，彼の真骨頂がある。この中には，逸話，情事，常規を外れた事，死に様などの報告が含まれる。特に，死に様（τελευταί）の報告は，ディオゲネス・ラエルティウスがその抜粋を作り，『パンメトロス（様々の韻律による詩集）』（DL VII 31）に利用したものである（RE, XV, 845-52）。

Th の著作目録は，アンドロニコスより古くはヘルミッポスにまで遡る。その証拠は，(1)『植物誌』（περὶ φυτῶν ἱστορίας）第7巻末尾の subscriptio (Codex Urbinas) において，この巻の異名 περὶ ῥιζοτομικῶν καὶ ποιωδῶν『小灌木と草』の典拠がヘルミッポスとされていること，(2)『形而上学』断片末尾の subscriptio において，アンドロニコスとヘルミッポスの目録が言及されていることである。

従来，Ar の目録もヘルミッポスに遡るとされてきたが，モロ（Moraux, 211-47）は，DL の目録も Hesychius の目録も内容別の配列なので，アルファベット配列をもつカリマコスの πίνακες に従うヘルミッポスに Ar の目録を遡らせることはできないとして，その代わりに，ケオスのアリストン（DL V 64）をそれらの出所とする。Th の目録については，ヘルミッポスに帰することに賛成する（Moraux 246）。

(32) アイオリス地方ピタナイオスの生まれで，ヘルミッポスによれば，75歳で死んだ（DL IV 44）。ラキュデスが，彼の死後，アカデメイアを継いだのが第134オリンピア紀第4年（B. C. 241/0）だから（DL IV 61），生年は前316/5年となる。アポロドロスの報告（DL IV 45）は採用しない（cf. Zeller, 508, 1）。故郷で数学者アウトリュコスに学ぶ。後見人でもある兄モイレアスは彼を弁論家にしようとしたが（IV 29），別の兄ピュラデスがひそかに彼をアテナイへ連れ出した。アテナイでは音楽家クサントスやテオフラストスに学ぶが，結局アカデメイアのクラントルの下へ行き（IV 29），ポレモン（IV 24），クラテス（IV 23）の影響もうける。詩文にも優れ，ホメロス，ピンダロス，イオンを研究（IV 31）。故郷に財産を有し，エウメネス王の援助を受ける（IV 38）。失敗に終わった公使の任務の他には政治に関わらなかった。アンティゴノス・ゴナタスの謁見を拒否した話が有名である。ミュニキア及びペイライエウスのマケドニア守備隊長ヒエロクレスとは昵懇だった（IV 39）。公然と売笑婦と暮らしたので，ストア派のキオスのアリストンに非難された（IV 40）。アルケシラオスは中期アカデメイア派の創始者といわれ，その懐疑主義によって知られる。プラトンを尊敬しその著作の写しをも

っていたといわれる（DL IV 32）。彼の説がエポケー（判断中止）自体を目的とした（Sextus Empiricus, adversus Mathematicos I 232）ものでピュロン主義と同じである（Eusebius, prae. eva. XIV c. 6, PG 21, 1201., Zeller, 512）のか，そのエポケーはあくまで真理発見のための方法でしかない（Cicero, Academica II 60., Arnim, RE, II, 1166）のかということをめぐり論争がある（近代の論争史の紹介，J. Grucker, Antiochus and the late Academy pp. 32-5）。彼の懐疑主義はストア派の独断主義と戦うものであった。彼は，ゼノンが知と感覚を媒介するものとして立てた把握的表象が真理の規準を含むことに，反駁の矢を放った（Sex. Emp., adv. Math. VII 150-157., cf. A. Doedeckemeyer, Die Geschichte des Griechischen Skeptizismus, pp. 35-6）。因みに，アルケシラオスもゼノンも共にアカデメイアのポレモンに学んだことがある（DL IV 24, VII 1）。

(33) アルケシラオスに傾倒し彼の死後はアカデメイアの学頭職を継ぎ（第134オリンピア紀第4年 B. C. 241/0, DL I 14, IV 59），死ぬまで26年間指導にあたった（B. C. 241/0-216/15, DL IV 61）。アポロドロスの報告によれば（fr. 70 Jacoby）18年間指導した後に隠退し，カッリストラトスのアルコーンの年（B. C. 206/5）まで18年間生きた（別の報告では隠退後10年間生きたという）。まじめな人柄であり，若いうちから勤勉で，貧しさの中にあっても優しく人付き合いの良い人であったという（DL IV 59）。新アカデメイア派の創始者と言われる（DL I 14, IV 59）が，それは，ラキュデスがエポケーの立場に留まらず，撤底した懐疑に進み，賢者は見解をもたない（ἀδόξαστος），物を覚えない（ἀμνημόνευτος）と述べた（Eusebius, prae, eva. XIV 7, PG. 21, 1209）ためであると推定される（Sext. Emp., ad. Math. I 220 などにおいては，カルネアデスが新アカデメイアの創始者となっている）。彼は優れた教師であったらしく，ストアのクリュシッポスも彼に学んでいる（DL VII 183）。アッタロス王から庭園を贈られ，そこで講義したらしい（IV 60）。

(34) 以下の目録は4つの部分から成る。筆者が Long の text に付した番号に従うと次の様になる。I, No. 1-109 (p. 217, 11-p. 221, 6 Long), II, No. 110-175 (p. 221, 7-p. 223, 15), III, No. 176-204 (p. 223, 16-p. 224, 15), IV, No. 205-226 (p. 224, 16-p. 225, 9)。I はアルファベット順であるが，△の部分における No. 22-27 (p. 218, 5-10) は，デモクリトス関係の書が彼の名に従ってまとめて組み入れられたもの，Z の部分における No. 41-48 (p. 218, 25-p. 219, 2) は，動物学関係の書がまとめて組み入れられたものである。A の部分における No. 13 (p. 217, 23) περὶ τῶν λιθουμένων α′β′ の乱れについて περὶ τῶν ἀπολιθουμένων (Regenbogen, RE 1408), περὶ τῶν ἀπολελιθωμένων (Usener, 4) の修正がある。II は I の補遺（III, IV も同様）であり，各著作の巻数は I に比べ少ない。配列はアルファベット順であるが若干の乱れがある。No. 126 (p. 221, 23), No. 138 (p. 222, 5) περὶ θαλάττης α′（ウーゼナーは κινήσεως を補う usener, 14),

No. 142 (p. 222, 9) *περὶ μέτρων α′* (*περὶ μετεώρων α′* の読みもある。本書の混入に関する推定は Usener, 14 を参照) である。No. 121 (p. 221, 18) *περὶ τῶν ἀδικημάτων α′*, No. 150 (p. 222, 17) *περὶ παρανόμων α′* は乱れではない。Ⅲに含まれる著作の内, No. 176–179 (p. 223, 16–19) の四著と No. 189 (p. 223, 29) と No. 203 (p. 224, 14) は, ⅠとⅡには含まれない新しいものだが, 他の大部分は, ⅠとⅡに含まれるものと同様である。Ⅲの配列はアルファベット順ではない。Ⅳの配列は再びアルファベット順だが, 若干の乱れがある。No 220 (p. 225, 3) *περὶ ἀριθμῶν α′* (Usener, 12の推定 *περὶ ῥυθμῶν α′*), No. 222, 223 (p.225, 5–6), No. 225 (p. 225, 8), No. 226 (p. 225, 9) である。No. 221 (p. 225, 4) *ὁριστικὰ περὶ λέξεως συλλογισμῶν α′* は Σの部の著作と見做す。

「植物誌」第7巻末尾における, 書名異同を報告する subscriptio (Codex Urbinas) と,「形而上学断片」末尾に見える注から, 古代における二つの目録の存在が確められる (cf. 注31)。ヘルミッポスは前3世紀後半の人で当時のアレクサンドリアの図書館を利用して目録を作成したと思われる。これは個別題に基づいたアルファベット順のものである。アンドロニコスは, 前1世紀中頃ローマにおいて, アリストテレスの全集を出版した人で, その目録は集合題に基づく。本目録はヘルミッポスを基礎とするが, 集合題も含まれているのでアンドロニコスも併用したと考えられる (cf. Regenbogen, RE, 1364–68)。目録の最後に添えられた行数記載はカリマコスの *πίνακες* の様式を反映したものと推定される (Frazer 453)。なお, 個々の著作への註は, 訳註の後にまわした。

(35) Diogenes Laertius には哲学者の遺言書が7つ残されている。(Plato, III 41–3, Epicurus, X 16–21, Aristotle, V 11–16, Theophrastus, V 51–7, Strato, V61–4, Lyco, V 69–74) Ar 以下 Lyco まで322年から288/5年までのペリパトス学派の学頭の遺書を尽くしているが, これらに基づいてペリパトス学派の学園の施設問題を論じたものとして, H. B. Gottschalk, Notes on the wills of the peripatetic scholarchs, Hermes 100 (1972) pp. 314–342 がある。上の遺言書の中では Th のものが最も十全なものであり, ギリシア人の遺言書の法律的取扱における尺度となり得る。このことは Th が専門の法律書を書いたことと無関係でない (cf. Bruns, 24)。これらの遺言書は, Strato の項の記述 (V 64) からみて, 前225年に Lyco から学頭職を継いだケオスのアリストンが集めたものである。真偽問題は, グラントの疑いに対するツェラー (Zeller, II⁴, 2, 41, 2) の批判以降, 一般に真作性が承認されているので, ここでは論じない。

(36) この導入形式は, Ar をはじめ他の遺言書にも見られる (Bauchet 665–6)。

(37) 多分, Th の兄弟。

(38) Th はヒッパルコスに金を貸していたと考えられる。*τὰ παρ' Ἱππάρχου συμβεβλήμενα* は,「ヒッパルコスによる積立金 (ab Hipparcho suppeditata, Ambrosius 訳, fol. Cobet)」ではなく,「ヒッパルコスから (返済を) 約束されたもの」である。*συμβάλλειν* は契約を結ぶの謂。*συμβόλαιον*, *συβεβλημένον* は

契約を表わす一般的表現である。cf. Bruns, 28-9., Bauchet, 700(1).

(39) 遺言事項の中で「譲る δίδωμι」と言われるのは私財であり,「望む βούλομαι」と言われるのはポリスの公共物に関してである (Lynch 99)。

(40) ブルンは「ムーサの社殿 μουσεῖον」と「社殿 ἱερόν」は同じだとする (Bruns, 29)。リンチは, Apollo Lykeios の聖域全体が ἱερόν だとする (Lynch, 101)。

(41) リュケイオンに近い Th の庭園はポリスの城壁の外にあった (注53参照) ので, 外敵の包囲に際し大きな損害をうけることになった。ここで修復を必要とするほどの破壊が行なわれたのは, ポリオルケテスの2度目のアテナイ攻略の時 (B. C. 296-294) か, アテナイが彼の支配に反抗した時 (B. C. 289-287) であろう (Lynch, 105)。

(42)(43) ムーサの社殿には二つの柱廊が付属していた。

(44) ニコマコスについては注22を参照。

(45) 前4世紀中頃に活躍した (大) プラクシテレス (「クニドスのアプロディテ」,「オリンピアのディオニュソスを抱いたヘルメス」などの作品がある) とは別人である。Theocritus, V 105への注釈 (J. Overbeck, Die antiken Schriftquellen zur Geschichte der bildenden Künste bei der Griechen, 1868, p. 398, 2073) にプラクシテレスがアンティゴノスの子デメトリオスの王の時代 (B. C., 294-288) にいたと記されている。Th の没年が前287年だから, 彼もその近くに生きていたわけであり, このことは上の注釈の報告の年代と合う。(大) プラクシテレスは ἀγαλματοποιός (神像の作り手) と呼ばれたが, この人は ἀνδριαντοποιός (人像の作り手) と呼ばれた。

(46) 多分, Ar から譲られていたもの (Lynch, 101)。

(47) 次に出てくる共同体の成員。

(48) ネレウスは, Ar の著作の中で度々名前が挙げられる「コリスコス」の息子で, スケプシス出身, Ar 及び Th の弟子 (cf. Strabo, XIII, I, 54)。Th はネレウスが後継学頭に選出されることを期待し, Ar の遺稿も含まれる自分の文庫を彼に譲った。だが, 期待に反し, ストラトンが学頭に選出され, 恨みからであろうか, ネレウスはその文庫をスケプシスに持ち帰り子孫に遺した (cf. v. Arnim, Neleus von Skepsis, Hermes, pp. 103-7)。その子孫はペルガモンの王 (エウメネスⅡ世) の書物狩りから文庫を守るために穴倉 (δι ὤρυξ τις) にこれを隠し, 湿気 (νοτία) と虫食 (σῆτες) にまかせていたが, 前1世紀の初め, 愛書家テオスのアペリコンという人がこの文庫を買い取り, アテナイでそれの低質な写本を多く作って販売した。アペリコンの死後, スッラがアテナイを占領した際, この文庫をローマに持ち帰ったが, Ar を好んだ文法学者のトゥラニオンという人が, ローマの図書館員からこれを手に入れた (Strabo, XIII, 1, 54)。彼は文庫を大部分整理したが, アンドロニコスはそれの写本を入手し, 出版した。その際, 目録も作成した (Plut., Sulla, 26, 1)。この有名な話は, にわかに信じがたい。というのは, ヘルミッポスに帰せられる Ar や Th の目録は, 前3世紀後半

においてアレクサンドリアの図書館に彼らの著作がかなり存在していたことを示すものだからである。Athenaeus, 3A-B の報告も参照。しかし，モロの様に(注31)，Ar の目録をヘルミッポスに帰さなければ，この話の信憑性も出てくるわけである。cf. Guthrie, 59-65.

(49) ファレロンのデメトリオスの仲介で取得した私有地。注27を参照。

(50) 上記の庭園の付属物であって，Ar が教えた「リュケイオンのペリパトス」とは異なる (Lynch 101)。散歩道が屋根のついた建物だったか単なる並木道であったかということに関して異説がある (H. B. Gottschalk, ibid, pp. 333-35)。

(51) ヒッパルコス，Ar の遺言書に見える管財人とは別の人である。Th に借金をしていた実業家であろう。ネレウス，前出。ストラトン，φυσικός と呼ばれた Th の後継学頭（在任，第123オリンピア紀〔前288-4〕から18年間)。プトレマイオスの息子フィラデルポスの家庭教師をし，80タラントンの報酬を得る (DL V 58)。デマラトス，Ar の娘ピュティアスとラケダイモン系のプロクレスとの間にできた2子のひとり (Sext. Emp., adv. Math. I 258)。カッリステネス，カッリノス，ニキッポスについては不詳。

(52) ピュティアスは3度結婚した。初婚はカッサンドロス配下の守備隊長で Ar の甥ニカノル。ニカノルの早死で子供がなかった。2度目はプロクレスとの結婚で二子（プロクレス，デマラトス）をもうけた。3度目がクニドスのクリュシッポスの弟子メトロドロス（注57を参照）との結婚でアリストテレスをもうける。この子は，Th の死の時点で未だ成年に達していない。

(53) 庭園内で埋葬可能というのは，この庭園が城壁の外にあったことを示す。多分リュケイオンに近い (Lynch, 101)。

(54) ストラトン（V 61）の遺書では「贅沢でもなく見苦しくもなく」となっており，リュコンの遺書でも同様だが，彼は自分の像を立てるように命じている（V 71)。

(55) ポムピュロス，注5参照。トレプテスは彼の妻。

(56) 遺言条項の第一に，家にある財産は，一切彼ら二人のものとの指示があるから，ヒッパルコスへ貸してあるものも彼らのものであろう。従って，本来は，ヒッパルコスが全額を二人に返済しなければならないが，彼の経済的逼迫がこのことを不可能にしたので，そして，二人には遺言執行が難しい事情があったので，取り合えず，ヒッパルコスから夫々に一タラントンを支払わせ，残りを遺言執行に充てることにしたと思われる。

(57) ケオス島イウリス出身。父は一時セレウコス一世の侍医であったクレオンブロトス，母は医者メディオスの妹姉であるクレトクセネ (Suidas, Ερασίστρατος)。ヘロピロスと並ぶヘレニズム期の大医学者。アクメーは第130オリンピア紀第3年（前258年）とも第4年（前257年）とも報告されている。彼の師は，プトレマイオスⅡ世の侍医であったクニドスのクリュシッポス（前277年没）である。この人の祖父で同名のクリュシッポスは，クニドスのエウドクソスと共にエジプトへ行ったことがあるが，Ar の娘ピュティアスの三番目の夫メトロドロスがこ

のクリュシッポスの弟子である。エラシストラトスはアテナイに出て来てからはこの人に学び，Th にも学んだ（RE, VI, 333-4)。彼は自らの生理学の基礎をデモクリトスの原子論に置いた（空虚を物体によって分けられた不連続のものと見做すなどの修正は行っている，cf. 西川亮「デモクリトス研究」p. 111)。また，解剖を手がけ，動物と人間の脳構造の比較や死体の病変部の研究を行った（RE, VI, 336)。身体の基本部分として管の三区分（τριπλοκία τῶν ἀγγείων）を立て，血管（静脈のこと)，アルテリア（動脈のこと)，及び神経の理論的に想定される細管から身体が出来上がっているとした。また，血液が栄養源として血管の中を通って全身に行き渡り，気息が活動を伝える働きをする（RE, VI,337-8）とした。心臓は血管とアルテリアの起点とされるが，プラクサゴラスは血管にだけ血液があり，アルテリアには気息しかないとしたが，エラシストラトスは，血管とアルテリアは毛細管でつながっていて，気息がアルテリアから流出する時出来る空虚へ若干血液が流れ込む（πρὸς τὸ κινούμενον ἀκολουθία の法則による）とした（RE, VI, 340)。彼によれば，胃で消化されて出来た血液は肝臓で浄化され心臓に入いり全身に送られるが，アルテリアには流れない。気息は内在せず，外から呼吸により取り入れられて肺から左心室へ入いり，そこで，脳へ行くアルテリアの中を流れるものと全身へ向かうアルテリアの中を流れるものとに分かれる（RE, VI, 341)。また，脳は神経の起点であり，神経には感覚性のものと運動性のものとがある（RE, VI, 343)。エラシストラトスと偽アリストテレス「気息について」との関係を扱ったものとして W. Jaeger, Das Pneuma in Lykeion, Hermes, 48 (1913) pp. 58-74 がある。

※ **著作目録の註は紙数の都合で次回にまわすことにした。**